

福島県 教育新聞

発行人 福島県教職員組合
発行所 福島市上浜町10-38 電話024-522-6141
〔定価一部 20円〕
編集・責任者 瀬戸 禎子
e-mail: ftukyoso@poplar.ocn.ne.jp
https://www.f-t-u.or.jp
(この購読料は組合費に含まれています。)

ろうぎんのキャッシュカードなら
ATMお引き出し手数料が

実質 **0円**

ご利用手数料はいったんご負担いただく場合がありますが、即時キャッシュバックいたします。

東北労働金庫

県人事委員会勧告完全実施！ 学校の多忙化と人員不足に歯止めを！

11月5日、県教育委員会との1回目の交渉が行われました。瀬戸委員長のあいさつの後、高橋政策監から県教組の要求書に対する一括回答がありました。私たちの給料に関しては、以下の通りです。

また、教採における倍率低下をはじめとする教職員不足とその原因の解消を強く訴えました。県教委側は配置の努力とやりがい・魅力のアピールを方策として挙げましたが、それらでの解決が困難であることはすでに明らかであり、休暇制度をはじめとした福利厚生制度の充実、広域異動・地区経験の廃止などによる働きやすい職場づくりを通しての「選ばれる福島県づくり」を訴えました。

給特法改正に伴う担任手当について、組合側は「担任業務は全員で支えるもの。担任手当は相応額を全員に支給すること」を求めましたが、県教委側は1学級あたり3,000円を実際に担任業務を行っている教員（チーム担任、複数担任含む）に日数等の実績に応じて配分する方法を提示しました。主任教諭については、現段階で導入の予定はなく、導入すべきかどうかを今後の研究課題としました。いずれも処遇改善の一環として国から示されたものですが、これらをもとに業務が特定の方に集中したり役割と称して業務が増加したりすることが危惧されます。



熱弁をふるう瀬戸委員長

◆県人事委員会勧告通り実施、月給やボーナスが引上げに！

① 民間の支給割合との均衡を図るため、ボーナスを年間で0.05月分引き上げ
〔期末手当・勤勉手当それぞれ0.025月分ずつ配分〕

② 若年層を重点に、全年齢層での月例給の引き上げ〔平均+2.97%の引き上げ〕

* ボーナスは12月分から、月給は4月まで遡って実施。どちらも、差額で支給される予定。ただし、県議会の進行状況により12月末までに支給されない恐れあり。

⇒⇒⇒県教組は、県公務員共闘に結集して年内の完全実施を求めています！

2025秋闘勝利 諸要求貫徹 10.28 県公務員共闘総決起集会 公務職場で働く仲間の切実な願いと要求を実現しよう！

10月28日、県庁において福島県公務員労働組合共闘会議に加盟する単産・単組の300人を超える仲間が結集し、「2025秋季確定闘争勝利！福島県公務員共闘総決起集会」が行われました。秋季確定闘争での要求実現に向け連帯して行動することが確認されました。

その後、交渉団は副知事交渉に参加し、参加者は市内をデモ行進し、多くの市民にアピールしました。副知事交渉の中では、教員配置の困難が原因で少人数学級を選択できない状況であること、60歳を超えてからの働き方（処遇低下、変わらぬ業務量）の問題のほか、安心して相談することができるハラスメント窓口の設置など、子どもも教職員も安心・安全な環境の実現を訴えました。県教組は、教職員の長時間労働・教職員不足の解消を中心とした誰もが安心して働き続けることができる職場の実現に向けて、11月5日、17日に行われた県教委交渉に全力で臨みました。



団結してガンバロー！

子どもたちに平和な未来を ～護ろう 憲法～

両性の自立と平等をめざす教育推進委員会学習会
第50回母と女性教職員の会福島県集会

神谷悠一さん

11月1日、二本松市男女共生センターにおいて、両性の自立と平等をめざす教育推進委員会学習会(両性研)と第50回母と女性教職員の会福島県集会(県母女)を開催しました。

両性研では、神谷悠一さん(LGBT法連合会代表理事)から講演をいただきました。「LGBT」当事者は、約8%存在し、30人の学級では2.4人の割合となります。「うちの職場/学校にLGBTはいない」と思い込んでしまわず、差別やいじめを許さない旨を方針化し相談可能な場を確保することが大切だと神谷さんはお話しになっていました。

午後は、県母女として、「子どもの未来のために」「性と多様性」「共に生きる 共に学ぶ」の3分科会で討論を行いました。話題提供として「南会津町でのフッ化物洗口の実態」「キャリア教育の視点で実践したジェンダー平等教育」「支援学級と交流学級の関わりによる子どもたちの変化」を受け、それぞれの分科会で学びを深めました。



【分科会感想・第1分科会】

福島市では、希望する学校のみフッ化物洗口を実施していますが、分科会の参加者の方から福島市の実施率が50%を超えていると聞き、衝撃を受けました。本校は今年の春に3つの小学校と中学校が統合してできた学校ですが、夏休み明けの職員会議で中学年のフッ化物洗口についての連絡事項として示され、前々から進められていたのですが、これでよいのかなと疑問に思っていたところでした。

学校は子どもが将来にわたり自分の心身の健康を守るための教育をすることが重要であることを再確認、共有しました。家庭や自分で選択でき、専門家の歯科医師のもとで実施するのが一番と感じました。



【分科会感想・第2分科会】

話題提供の実践がすばらしく、もっと周りの人々と共有していきたいと思いました。分科会に参加された方達の実践や話を聞き、やはり集まって話すことの大切さを実感しました。

【分科会感想・第3分科会】

話題提供の実践を元に特別支援についての学びを深めることができました。各校種、学校ごとに様々な悩みを抱えながら、担当者が工夫し、子どもたちと関わっていることを知ることができ、力がわいた。

2025年度日教組平和集会 in 長崎！

昨年、福島県楡葉町Jヴィレッジで開催された日教組平和集会は、今年被爆80周年の年でもあることから、長崎県長崎市で開催されました。1日目は、日教組被爆二世教職員の会副会長の平野伸人さんから「私のたどった平和活動の歩み」という演題で講演をいただきました。平野さんは母と姉が長崎で被爆し、ご本人は1941年に生まれました。高校生の時に、両親とも被爆者の同級生が再生不良性貧血で輸血し続けなければならなくなったことから、被爆二世と原爆の影響の恐ろしさについて強く感じたそうです。その後、教員となった平野さんは、「日教組被爆二世教職員の会」の結成に関わり、高校生平和大使の活動にも関わってこられました。高校生平和大使の平和に対する力強いアピールが印象に残りました。

『戦争のできる国』づくりに関する問題」「核と人権に関する問題」「戦後補償や国際連帯のとりくみ」「平和をすすめる運動・教育」の4つの分科会が行われ、それぞれのテーマについて活発な協議がされました。

2日目は、長崎県教組の青年部が案内人となって平和公園周辺のフィールドワークを行いました。

【分科会感想・第3分科会】

小学校や中学校などが行事等で宿泊する際、「宿泊税」は免除されます。しかし朝鮮学校は、学校教育法の規定を根拠とされ課税対象となっており、この問題に対して広島では県知事や県議会に対し、課税免除とする要望書を提出しました。日本で学ぶ朝鮮学校の子どもたちが、こうした差別の渦中にあることを初めて知りました。朝鮮学校が設立された戦後の経緯や、広島への修学旅行等の教育的意義からも、こうした差別が早く無くなることを望みます。

【フィールドワーク】

山里小→浦上天主堂→山王神社→長崎大医学部→平和公園のルートでそれぞれの場所を青年部のみなさんに案内・説明していただきました。離島に勤務されている青年もいて、フィールドワークのために何度も集まってこの日を迎えたことに、平和を大切にしたい、伝えたいという気持ちが伝わってきました。



福島県内にも被爆二世に教職員の方がいらっしゃる可能性があります。心当たりのある方は、福島県教組までご連絡ください。

吉田書記次長の ふくしまオルグ紀行⑬



新採用の方の組合加入が今年は例年以上に多いです。分会や支部での働きかけのおかげだと思います。ありがとうございます。

Yさん（西白支部・小学校教員）

①「組合に入ろう」と思ったきっかけは？

「他の職場の先生方ともつながりをもちたいと思ったからです。」

②今のお仕事をめざしたきっかけは？

「幼い頃から子どもが好きでした。大学で学んだことを、教育に生かしたいと思ったからです。」

③これから、どんな学校（職場）になってほしいと考えますか？

「職場にいる全員が、働きやすい、安心できると感じられる職場になってほしいです。」



昨年、組合員の学級で教育実習をされていたYさん。大学生の立場で支部の学習会にも参加してくれました。この春から採用となり、赴任先だけでなく、実習校の組合員ともつながりながら、毎日頑張っています。

Yさんが大切にしたい「つながり」。多くの方に感じていただきたいです。

Kさん（南会支部・中学校教員）

①「組合に入ろう」と思ったきっかけは？

「同じ学校の先生に紹介され、興味をもちました。自分自身の視野を広げたいと思い加入しました。」

②今のお仕事をめざしたきっかけは？

「中学校での教育実習で、学校に来られていない子も、学校に来ている子も、少しでも学校を楽しんでいると思ってもらえたらと思ったことがきっかけです。」

③これから、どんな学校（職場）になってほしいと考えますか？

「今の職場は明るく活気があります。今後も風通しが良く安心感のある場所であることを願っています。」



県外ご出身のKさん。これまで勤務した経験を通して、福島県の魅力を感じ、採用試験を受験されたそうです。

同じ分会の組合員さんの声かけや、支部歓迎会への参加が組合加入のきっかけになったそうです。多くのつながりをつくり、福島県で活躍していただけることを願います。

お世話になりました！

県教組キャラバン

9月から進めてきた秋闘キャラバンも終盤を迎えました。分会で対応してくださった皆さん、参加してくださった支部執行部・オルガナイザーの皆さんに感謝いたします。キャラバンで聞かれた声を紹介します。

〈今年度はじめて異動したAさん〉

他地区への異動は不安もありましたが、組合の方がこうして気にかけてくれることがとてもありがたいです。話を聞いてもらえると元気が出ます。

〈中学校事務職員のBさん〉

生徒が落ち着かないのは教職員不足も一因だと思います。校内の問題で先生たちが疲弊していて、事務室からも何かできることはないかな…と感じています。若い先生たちにも組合のことを知ってほしいですね。

県教組では現在「職場会でピアカウンセリング」の取り組みも進めています。職場会を通して、普段感じていることを職場の仲間と共有してみませんか。ひとり分会の方は、県教組行事や支部の会議などへの参加を職場会に代えます。実施報告は右の二次元コードからも可能です。

しめきり…12月25日(木)



25職場会

は学校で! Monster



みんなのひろば ～鏡石町 中華そば 本田商店～



レトロなポスターが並ぶ店内で食べる
会津の醤油を使い、鶏のうまみたっぷりスープのラー
メンが絶品です!!

ツルツル、モチモチの自家製麺もとってもおいしく、
3種のチャーシューもとろけるおいしさです!

中華そばはもちろん、より透き通った
淡麗中華もおすすめてですよ!

(郡山支部 Kさん)



みんなのひろば 原稿募集

このコーナーは、組合員のみなさま
から、ほっこりしたり、感動したり、
ためになったりするような素敵な情報
をお待ちしております(*^_^*) 掲載
された方には御礼としてクオカードを
プレゼントいたします!

★メール

(ftukyoso@poplar.ocn.ne.jp) や
FAX (0120-17-9312)、
公式LINEでお寄せください。

LINE公式アカウント

ぜひ友だち登録をお願いします!

@894amadj



最新の情報をお届け♪
学習会等のお問い合わせや、
日々のお悩みも気軽に
ご相談ください!



ノスタルジー

「今回のテーマは「正解の不確かさⅢ」」

子どもが自分をみつけ歩み出すには時間がかかる場合がある。それも長い時間が。だから教育は短い時間の中の「できる」「できない」で判断すべきではない。

二〇一一年四月は六年生を担任した。東日本大震災・原発事故が起これ、混乱する中の卒業学年。いろいろ乗り越え、卒業の文字が見えてきたころ、一人の転校生が多くのクラスにきた。被災地からそしてこの時期の転入、いろんな想いを背負ってきたのだろうとぼくは思った。クラスの子どもたちと過ごして笑顔を見せて欲しい。それがこの子の力になるだろう。そう思っ教室に入ってもらおうことを試みた。でも彼女は、昇降口までは来るのだが、そこから中に入ることはしなかった。そのまま卒業。悔いが残った。

それから約十四年後の今年二〇二五年偶然彼女と再会できた。彼女は今、被災地の地元に戻り役場に勤務して、子どもやその親たちに寄り添う仕事をしているそうだ。

「あの時は学校に行けず、周りの人たちに迷惑をかけた思い出の方が強いけど、その経験がなかったらこのような道に進むことはなかった。震災や不登校で自分と同じ気持ち、経験をした人たちに寄り添える人になりたい。と思った。」と話してくれた。

実際に仕事の中で苦難や人の支えを経験して、「人の気持ちに共感して他人のためにになりたい。更に今では、他者のためだけではなくて自分自身のことと認めてあげたい。」と思うようになったと彼女は輝いて語る。

あの時の「できない」経験を原動力に今を生きるその生き様にぼくは熱いものがこみ上げてきた。つらさもあつただろうに「できない」を受け入れ、それを分かち合うことで彼女は自分を認められるまでになった。教育者は往々にして「できない」ことをすぐに「できる」ようにさせたがる。しかし、今まさにことはそんなに単純でないことが特にメンタル面で言えるのではないだろうか。経験や様々な支えによって、すぐにではなくてもぼくたちの「力になりたい」は届くのだと思う。そう彼女はぼくに教えてくれている。今を変えることだけが正解ではないのではないか。

長い時間をかけて彼女は自分を表現できるようになった。それまでには、たくさん苦勞や努力があったことだろう。それを支えている人たちがいることを感じられたからこそ今があるのではないだろうか。教育とは、そんな力なのだと思う。

(K・I)